

連載コラム

みずき野と
その周辺の
植物と昆虫

第16回

イネ科植物のいろいろ
(晩夏から秋へ)



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(16) イネ科植物のいろいろ

(晩夏から秋へ)

まだ残暑厳しい8月ですが、稲穂を渡る風が秋の到来を感じさせます。

初夏から盛夏までに穂を出すイネ科植物については、本連載コラム第13回で述べました。今回は、晩夏から晩秋までのイネ科植物のうちで、みずき野周辺によく見られるものについて述べてみたいと思います。

すでに第13回で述べたように、イネ科の花は通常に見られる花と少し違っております。イネ科の花は特別に「小花(しょうか)」とよびます。穂の先端や枝に小花が群がってつき、その一つ一つの小花の群がり「小穂(しょうすい)」とよびます。小穂の基部には2枚の小さな変形した葉がついており、これを「苞穎(ほうえい)」とよびます。小花には、通常の花に見られるような萼(がく)や花弁がなく、「外穎(がいえい)」(護穎)と「内穎(ないえい)」に囲まれています。外穎も内穎も葉が変化したものです。外穎には先端に芒(のぎ)をもつものがあります。第13回に載せたイネ科植物の花の説明も参照して下さい。

(1) エノコログサの仲間

エノコログサの仲間は、どれも1年草。五穀の一つとして栽培されるアワ(粟)に近縁の植物です。アワはエノコログサを祖先とする栽培植物とも考えられています。

エノコログサそのものは初夏から晩秋まで路傍や野に生える雑草で、小穂の基部から剛毛が生えており、犬の尻尾を連想させることから、エノコログサの名がついたと考えられています。ネコジャラシという俗名の方がよく知られているかもしれませんが。エノコログサの穂を抜いて、猫と遊んだ経験のある人も多いのではないのでしょうか。

8月以降になると、野にはアキノエノコログサが目立つようになります。エノコログサの穂は比較的短く、直立しているものや、多少傾いているものがありますが、アキノエノコログサの穂はエノコログサより太く長く、先端を下に向けて、深く垂れています。



上：エノコログサ

7月中旬

5丁目

下：アキノエノコログサ

8月中旬

本町地区

エノコログサは7月に撮った写真ですが、アキノエノコログサとの比較のために載せました。

秋も深まる頃、穂が細く、剛毛が黄金色の、美しいキンエノコロの群生が見られます。キンエノコロによく似た、紫や緑の剛毛をもつコツブキンエノコロも少数ながら見られます。



キンエノコロ

9月下旬

第2調整池

(2) チカラシバとカゼクサ

チカラシバは荒地や路傍、とくに農道によく見かける多年草で、がっしり根づいて力持ちでも引き抜けないのでこの名がついています。紫色の剛毛は小穂の基部についています。この剛毛は、小穂ごと動物のからだにくっついて、種子を遠くに伝搬させるのに役立っています。



チカラシバ
9月下旬
貝塚地区

穂のかたちは違いますが、カゼクサもチカラシバと同じような場所に生え、チカラシバと同様、力持ちでも引き抜けない頑丈な多年草です。以前、農道に叢生しているカゼクサの長い葉を束にして、二つの束を結んで輪をつくり、知らずに通りかかった人が輪に足を引っ掛けて転ぶのを楽しむという、悪ガキどもの遊びがありました。



カゼクサ
9月中旬
貝塚地区

(3) ジュズダマ

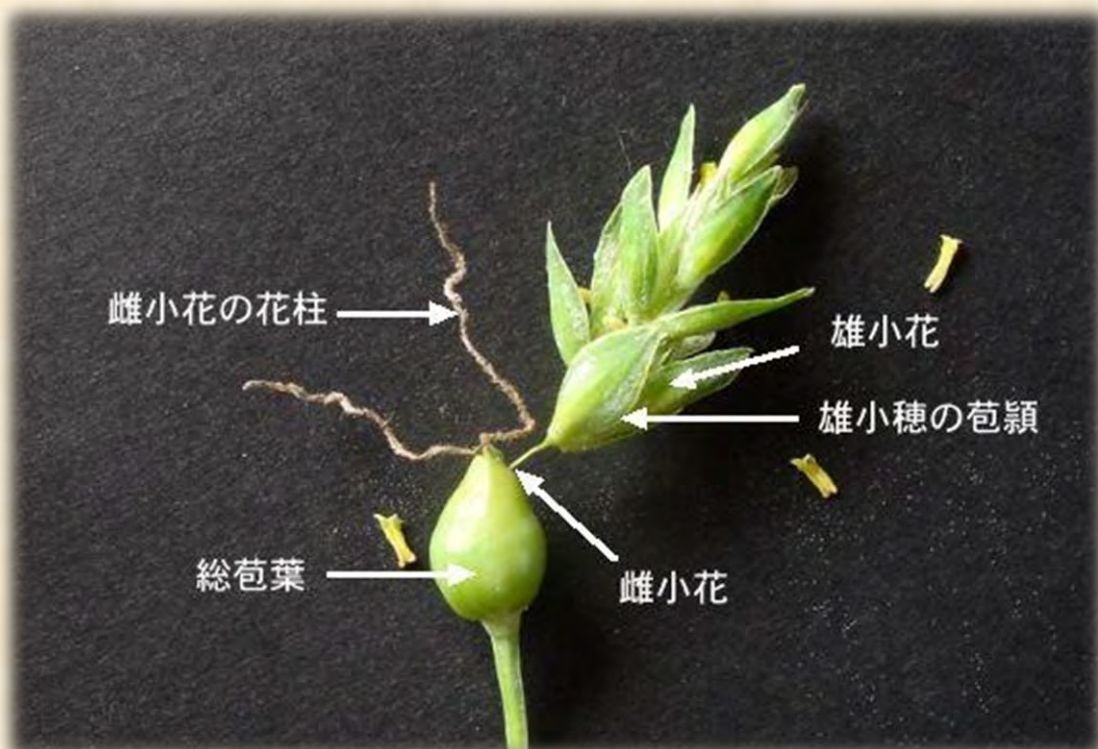


一見よく似たイネ科植物の中で、珍しく一目瞭然、これと分かる植物で、水辺に多い1年草です。その名は堅い実を数珠として使ったためと思われます。その他、お手玉やいろいろな細工物の材料として使われることもあります。なお、ハトムギはジュズダマの近縁種で、実が柔らかく、こちらは健康食品として使われ、ヨクイニンともよばれています。



ジュズダマ
9月上旬
上高井地区

ジュズダマの小穂については多少の説明が必要です。壺状の実は、科学的には総苞葉とよばれるもので、葉が変形したものです。この総苞葉の壺の中に雄花(雄小花)の房と雌花ができます。雄花の房は壺の先端から上部にとびだしてきます。雌花(雌小花)は壺の中にとどまり、受精に必要な雌しべの花柱を壺の先端から外部に出します。説明だけでは分かりにくいので、穂の構造を写真で示しました。



ジュズダマの
小穂の構造

説明は本文参
照のこと

(4) トダシバ



農道のへりなどにごく普通の多年草です。小さなものから1メートルに達するものまであり、穂の枝を横に広げた姿が印象的です。写真は青空をバックに下方から撮ってみました。名は東京に近い埼玉県の戸田ヶ原に由来するものです。



トダシバ
9月下旬
貝塚地区

(5) 又カキビ



キビの仲間の1年草ですが、穀物であるキビとは、すがたがまるで異なります。小さな小穂をちりばめた穂が揺れて、秋風を感じさせる植物です。水路のへりや湿った場所に好んで生えます。又カキビの名は、もちろん小さな小穂に由来します。



又カキビ
10月中旬
貝塚地区

(6)  コブナグサ

田のへりや湿地に生える1年草。草丈は40センチ前後の小さな可愛い植物です。コブナグサの名は、葉のかたちが小鮒に似ていることに由来します。八丈島ではコブナグサをカリヤスとよび、黄八丈の染料の原料として用いています。



コブナグサ
10月中旬
本町地区

(7)  アシ (ヨシ)

アシは湿地や休耕田に群生する大型の多年草で、みずき野周辺にも至る所に目につきます。標準和名としてはヨシが使われますが、アシ(葦)の方が古い名で、現在もヨシの別名として使われています。



アシの穂
10月下旬
本町地区

葦の原を葦原とよび、古事記や日本書紀では、日本を「葦原の国」、「葦原の中つ国」などと呼んでいます。湿地や沼が多く、土地利用もごく僅かであった古代には、大規模な葦の草原が広がっていたことでしょう。「葦原の国」などの名称があるほどですから、万葉の歌人も葦や葦原に強い関心があったのでしょう。



アシ原 青々としたアシ原の6月上旬の風景 本町地区

葦へ行く 鴨の羽がひに 霜降りて

寒き夕べは 大和し思ほゆ

志貴皇子（64）

和歌の浦に 潮満ち来れば 漉を無み

葦辺をさして 鶴（たづ）鳴き渡る

山部赤人（919）



アシは、「葦原の国」日本だけでなく、ほとんど全世界で見られます。西洋のアシに関しては、ギリシャ神話のシュリンクスの物語が思い起こされます。シュリンクスは美しいニンフで、アテナ女神を崇拜し、女神にあやかって処女であり続けたいと願っていました。しかし、シュリンクスは好色な牧神パンに見そめられてしまい、水際まで牧神に追いつめられて、とっさにアシに変身したと言い伝えられています。牧神は、悲しみのあまり、長短に切ったアシの茎を組み合わせ、笛を作ったのです。これが現在も楽器として使われているパンフルート（パンパイプ）の名の由来です。しかし現在のパンフルートはアシではなく、ダンチクが使われているようです。



(8) オギとススキ

オギもススキも大型の多年草で、両種は外観がよく似ていて、遠目からは識別が困難です。ただしオギは湿地に生え、ススキは乾いた場所に生えるので、生えている場所でどちらであるか見当がつきます。そのほか、オギは稈（イネ科の茎のこと）が一本ずつ独立に生えますが、ススキの稈は叢生してはえます。またオギの小花には芒（のぎ）がほとんどなく、ススキにははっきりと芒のあることで区別がつきます。



オギ
10月上旬
本町地区

ススキ
10月上旬
本町地区



オギとススキの穂の比較

左：オギ

右：ススキ

オギは芒がないか、ごく短く、目立たない。小穂の基部に銀白の長い毛がある。

ススキははっきりとした芒がある。小穂の基部の毛は短い。

オギは古くから知られ、万葉集にも歌われています。

葦辺（あしべ）なる 荻（をぎ）の葉さやぎ

秋風の 吹き来るなへに 雁鳴き渡る

作者不詳（2 1 3 4）

（「なへに」は「と共に」）

ススキはオバナ（尾花）ともよばれ、イネ科では唯一「秋の七草」に入れられています。ススキはイネ科植物の中でももっとも目立ち、また風に揺れるすがたが印象的で、ススキを詠み込んだ歌は万葉集をはじめ、後代の多くの歌集、句集に見られます。

万葉集の中から、

さを鹿の 入野のすすき 初尾花

いつれの時か 妹（いも）が手まかむ



作者不詳（2277）

この歌の主意は「いつれの時か妹が手まかむ」ということで、「何時になったら、あの児のてをまいて、一緒に寝ることができるだろうか」という意味です（斎藤茂吉「万葉秀歌」岩波新書）。「・・・初尾花」までは「いつれの時か」にかかる序詞です。この序詞によって、作者の思いが強く表されているように感じます。

時代は下って、芭蕉の「奥の細道」の中の句、

小松と云（いふ）所にて

しをらしき 名や小松吹く 萩すすき



北陸路の秋の爽やかさが感じられる句です。

ススキの動きに風を見ることがしばしばあります。そよ風であったり、ざわめく風であったり。


宮澤賢治は、童話「風の又三郎」のなかで、ススキに風を表現させています。野分の季節でしょうか。風の方向は一定しません。

「風が来ると。芒（すすき）の穂は細い沢山の
手を一ぱいのばして、忙しく振って、
『あ、西さん、あ、東さん。あ、西さん。あ、
南さん。あ、西さん。』なんて云ってゐる様
でした。」

逃げる馬を追って、道に迷ってしまった少年嘉助が見たススキの群れ。嘉助（高田三郎すなわち風の又三郎と同級の五年生）の不安な気持をも反映している一場面です。



秋風の吹くのを待って、ススキをはじめ、風媒花であるイネ科植物のそよぎに風のすがたを見たいと楽しみにしております。



2015年8月
本吉 総男